



泣き虫姐と四天王

潮吹きセックス四番勝負



囚われの姫
アリア・アンダーグラウンド

よしっ！

私たちで
アリアちゃんを
元気づけてあげよう！！

ああ
それがいい…

いや
俺の計算によると
『それしかない』

魔王軍四天王
フィヨル・セカンド

魔王軍四天王
ランド・サード



魔王軍四天王
レッドボーン・フォース

我らが
四天王である
所以…

とくと
見せつけてやろうぞ



ファーストは
すでに勇者に
やられたが

我らとて
負けてはおれん!!

ああ

あいつは
四天王の中で

まずは
フィヨル
行きまーすっ!!





そんなこと言って
いつも
一人でエッチしてるの
知ってるんだよ

素直じゃない子は
オシオキ♡

そ…
そんなこと…

かつ…ひ…!?

ビ
ッ
ッ

|||||

ワ
ッ
ッ

♡
品
ッ

ん
ッ
ッ







私たちの勝手に
連れてきちゃったんだから

もっと自分の
気持ちに正直になって
いいんだよ♡



お…ん…?

イ…グ♡







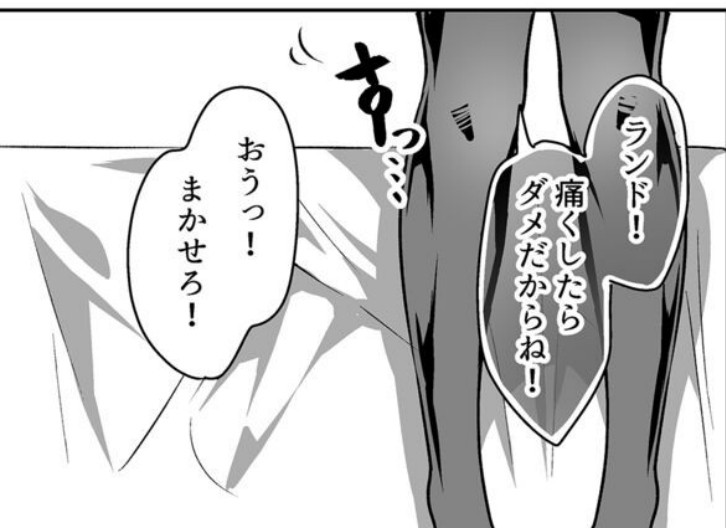


イキ死ぬかと思いました...

アリアちゃん
どうだった？

かわいい...♡

キューン



泣き虫姐と四天王

潮吹きセックス四番勝負



また潮
出るっ!!

いきなり
こんなっ...!!

イクっ!

んあーレ

グググ
グググ
グググ

まっ

ゴッ

ゴッ

ゴッ

ゴッ

♡









おちんちんが
奥まで届くたびに

おっ

んっ

あっ

アリアー!

奥...
出すぞ!

ゴリゴリって
奥までくりゆっ...



イッパ!?

ビビッ

ビビッ

ビビッ

ビビッ

ビビッ

ビビッ

ビビッ

ビビッ

ビビッ

ビビッ

ビビッ

ビビッ

ビビッ





やあ...

まだ出てくる...♡

ドリ♡

ジュウ

ジュウ

かあ...

次は私の番だな

あまり無茶させるなよ
レッドボーン

〇〇〇

ジュウ

ジュウ



ああ…
まかせてくれ

泣き虫姐と四天王

潮吹きセックス四番勝負

指だけで…
奥届いてる…♡

ぞりぞり

こりこり

きん

きんきん

あつ!
それダメっ!

く

か

ちゅぽんぽん

イクイク

グッ

グッ



おちんちんも
おっきいのかな...

んん...♡

...入れてほしいな

入れられたら私...
壊れちゃうかな...♡



もっ!!

もっ!!

もっ!!

もっ!!

ちよつと待って...

こんなの
入んにゃい...

もっ!!

もっ!!





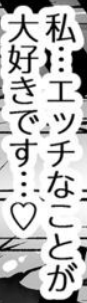
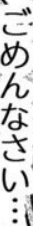






泣き虫姐と四天王

潮吹きセックス四番勝負





ただ：そろそろ
失神しそうなので

また今度
お手紙出しますね



だから：
今だけは：

A black and white manga-style illustration of a young woman with long blonde hair, looking shocked and sweating. She is surrounded by large, stylized Japanese sound effects like "ドン" (Don), "カッ" (Ka), and "パッ" (Pa). A vertical speech bubble on the right says "幸せのままではいきたいの♡" (I want to stay happy like this ♡).



泣き虫姐と四天王

潮吹きセックス四番勝負





泣き虫姫と四天王
- 潮吹きセックス四番勝負 -

イラスト
KENTO OKAYAMA

シナリオ
KENTO OKAYAMA

KUSO NAGAI ATOGAKI

-くそながい あとがき-



こんにちは、KENTOです。

まずは、「泣き虫姫と四天王 ～潮吹きセックス四番勝負～」をご購入していただき、誠にありがとうございます。読んでいただけたということが、僕にとって最高の幸せです。

今回の漫画は、同人誌としては9作品目だ。しかも、40という大量のページ数は商業誌向けでも描いたことがない。だが、大変だった自覚はなく毎日決まったノルマをこなしていたら、いつの間にか完成していたという感覚が強い。ちなみに、今回の漫画の製作期間は2カ月だ。

以前、漫画を描いている知人と話をしていた時、「漫画を描いている時は、何も考えちゃいけない」と言っていた。これは結構その通りで、「何で自分はこんな大変なことをしているんだろう」、「早く完成させたい！早く終わらせたい！」と考えてしまうと、描くことを止めたくなってしまう。長期的に何かを作るときはとにかく、「夢中になること」と「その日のノルマを淡々と達成すること」が大切だ。マラソンだって、スタートからゴールまでを冷静に見てしまうと、途方もない距離に感じる。しかし、余計なことを気にせず淡々と走り続ければ、気づいたらゴールにたどり着くはずだ。

★商業誌の漫画家になるには？

今回のあとがきでは、「漫画家になるには？」を話そうと思う。といっても僕は、同人活動の方は一年になるが、商業誌の漫画家歴は2カ月ちょっとの超新人作家だ。だから、「連載のノウハウ」の話ではなく、どうしたら漫画家としてスタートラインに立てるか、言うなれば「どうしたら商業誌に掲載されるようになるか」の話をしようと思う。

結論から言うと、「商業誌に掲載させてもらえるかどうかは、出版社の編集さんが決める」ということだ。ストーリー構成が下手でも、画力が高い作家。画力は低いが、ストーリー構成が上手な作家、といったように様々なタイプの漫画家がこの世にはいる。だからこそ、「これぐらいの画力が必要」とか「これぐらいのストーリーを考えられるスキルが必要」といった基準は意味がない。だって、すべてを判断するのはお客さんでも作者でもなく、編集さんのだから。

僕は、とある出版社に持ち込みを行った。それも一つの出版社ではなく、出版社A・出版社B・出版社Cと複数の場所に持ち込みを行った。まず最初に繋がりを持ったのは出版社Aだ。そこでは「今の原稿のままでは掲載レベルに達していないから、修行をしてレベルを上げれば掲載させられるかもしれない」と言ってくれた。そこから3カ月ほど出版社Aの編集さんとやり取りをして、レベルを上げる努力をした。しかし結果は実らず、こちらから辞退することになった。これは、出版社Aの編集さんの掲載基準に達することが出来なかったということだ。こうなってくると、「じゃあ他の場所でも断られるんだろうな」と感じる。だって、業界のプロに認められなかったのだから。

しかし、そこで終わりではなかった。出版社Bの漫画コンテストに応募した作品と、出版社Cに持ち込みを行った作品が後に結果を出すことになる。（→次のページへ）

2021年3月、出版社Cから連絡がきた。「作品の持ち込みありがとうございます」といった冒頭のメール。以前、出版社Cに持ち込みを行った時は散々な評価だったため、完全に諦めていた矢先のことだった。メールはその後こう続く。

「ぜひ、弊社の雑誌で漫画を連載していただませんか」

夢かと思った。まさしく、崖下の海に落ちた途端、上から救助用のロープが垂れてきたようだった。僕は快くロープを掴んで、出版社Cからの提案を承諾した。

さらにそこで終わらず、出版社Bからも「漫画の掲載」の依頼をいただいたのだ。これは、出版社Bが主催する漫画コンテストに応募していた作品が、その編集さんの目に留まったのだとか。ある時、とある作家さんが締め切り日に間に合わない状況になったらしい。そこで、僕に埋め合わせとしての連絡が来たということだ。

だが一つここで重要なのは、「掲載させてもらえる！ いえーい！ めでたし、めでたし！」ということではない。実は、出版社Bに応募した作品と出版社Cに持ち込みを行った作品は、出版社Aに評価してもらえなかった作品だったということだ！

これはつまり、僕の作品は出版社Aの基準は満たしていなかったが、出版社Bと出版社Cの基準には満たしていた事実を表している。

この時、僕は思った。

「商業誌向けの漫画家になるには、お客さんの基準を満たすことでもなく、自分の中の基準を満たすことでもない」

「原稿を見てくれた編集さんの中にある基準を満たせばいいんだ」と。

結局、決定権を持っている編集さんに認められることが一番の近道になるのは、至極当然のことだ。だが、数多くの大成した漫画家を見てしまうと、「自分はまだまだなんじゃないか」と足がすくんでしまう。しかし、恐れることはない。

ただ一人、自分を認めてくれる人を見つけられればいい。

「この人はしばらく、自分を認めてくれそうにないな」と思えば、離れればいい。

認めさせるよりも、今の自分の実力を認めてくれる場所を見つけることが、スタートラインに立つ一番の近道ではないだろうか。

しかし、おごってはいけない。努力を絶やしてはいけない。

出版社Aの編集さんと一緒に修行をした日々があったからこそ、今の僕がいる。その編集さんには認めてもらうことは出来なかったが、耳の痛いアドバイスをたくさんしてくれた。

褒めていただけるのは、とても嬉しい。それは、編集さんにでもお客さんにでも変わらない。

褒められると、また明日も頑張ろうと思える。

しかし、真に成長を促すのは聞き心地の良い言葉じゃない。

建物の美観を褒めるよりも、建物の欠陥を指摘する方が、遥かに有意義で素晴らしい行動である。

自身の欠点を知り、自分の欠点を愛す。

そして、その欠点を直すかどうか決めるのは、他の誰でもなく自分自身なのだ。

PRESENTED BY KENTO OKAYAMA

お問い合わせ&感想はこちら！

★E-Mail

kentookayama145@gmail.com

★ウェブサイト

<https://kentookayama.jimdofree.com/>



Twitter



Pixiv